

児童期におけるアタッチメント研究の動向と展望

金丸 智美*

はじめに

John Bowlby (1969) が提唱したアタッチメント理論は、発達心理学でのグランド・セオリーとして数多くの研究の蓄積を持つとともに、近年では、子育て支援や教育分野だけではなく、司法やDV・アルコール・薬物依存症への介入などさまざまな領域の臨床実践にも応用されている（北川・工藤, 2017）。Bowlbyが特に強調したことは、子どもが発達早期に形成する養育者とのアタッチメントの質が、乳幼児期のみならず児童期や青年期さらには成人期と生涯にわたり、人の心理的発達や心理的健康に影響を及ぼすという点である。乳幼児期から成人期にかけてのアタッチメントの質が連続しているのか否かを総括的に検証する研究もなされており（e.g., Fraley, 2002）、その連続性はほぼ妥当なものとされている。

このように生涯にわたるアタッチメントの影響が注目されてはいるものの、当初Bowlbyらの研究が乳幼児の子どもとその母親を対象としていたこともあり、従来の研究では、乳幼児期に関するものが圧倒的に多いといえる。その中の多くの研究では、子どものアタッチメントの個人差を把握するために、Ainsworthら（Ainsworth, Belhar, Waters & Walls, 1978）が開発したStrange Situation Procedure（以下SSP）と呼ばれる、子どもを母親との分離・再会というマイルドなストレス状況に置き、そこでの子どもの行動をもとにアタッチメント分類を行う手法が使われている。また、青年期以降成人に関してはHazan & Shaver（1987）の成人愛着スタイル尺度をもとにした質問紙や、過去の養育者との関係についてのインタビューというAdult Attachment Interview（以下AAI）によってアタッチメントの個人差を捉える研究が増えている。その一方で、乳幼児期と青年期以降の間である児童期についてのアタッチメント研究は長い間、乳幼児期のSSPや成人期のAAIに相当するような、個人差を測定するゴールドスタンダードな尺度がなかったこともあり、空白とされてきた。しかし、近年では児童期を対象としたアタッチメント研究も増えつつあり、個人差を測定する尺度も複数開発

*総合福祉学部 准教授

されている。また、アタッチメントの生涯にわたる重要性が認められている昨今、乳幼児期と青年期以降の間にある児童期が、発達的にも、養育者との関係性の上でも、どのような特徴や意義を持つのかを見直すことも必要であろう。

以上から本稿では、児童期（6歳頃から12歳頃）におけるアタッチメント研究の動向をいくつかの観点から整理するとともに、今後の研究に求められる点を考察する。

I. アタッチメント理論の前提

ヒトを含む多くの動物の子どもは、危機的な状況に置かれると、自分より有能で頼りになる個体に接近し接触することで不安や恐れを低減しようとする。Bowlby (1969) はこのような、人間の乳幼児が、泣きや発声で養育者を呼び寄せ、しがみつくななどの行動によって安全感や安心感を得ようとする傾向を「アタッチメント」とし、養育者が子どものこうした行動に応答することによって、子どもは養育者に対して特別な情緒的な絆を築くとした。

アタッチメントは生後すぐに形成されるのではなく、特別な対象を子どもがほとんど識別しない時期から始まり、生後半年以降になって特定の対象にのみアタッチメント行動を示すようになることでアタッチメントが形成されたときみなされる。そして発達の最終段階は、3歳頃以降の「目標修正的な協調性の形成」であり、子どもが他者の意図や感情という内的状態を理解するようになるため、養育者の行動、目標、計画を理解し、これらに合わせて子どもが自分の行動や目標を修正することができるようになる。さらにこの時期には養育者が目の前に存在しなくても、養育者を表象（イメージ）として思い描くことで安心感を得ることが可能となる。子どもは困難なことに遭遇したり不安を抱いたりした際に助けを求め、養育者に助けてもらうというやり取りを重ねることで、養育者はいつでも助けてくれ、自分は養育者に助けや保護を求めるに値する存在だという表象を抱く。Bowlby (1973) は、このような、子どもがアタッチメント対象との関係の中で得た主観的な期待や感覚をもとに形成された抽象的な表象のまとまりをInternal Working Model (内的作業モデル：以下IWM) とし、生涯にわたる対人関係の一種の「ひな型」として影響を及ぼすとした。つまり、IWMの内容は乳幼児から成人期にかけて、ある程度維持され続け、個人の対人関係の質やパーソナリティを形成するといえる (Fraley, 2002)。

ヒトの乳児は共通して、危機的状況ではアタッチメント行動を示すものの、その様相には個人差があることに着目し、実験的に検証する方法を見出したのがAinsworth (1978) である。彼女はそのような個人差を捉えるためにSSP法を開発し、子どもの行動の様相をもとにアタッチメントを安定型(B型)と不安定型(回避型:A型、葛藤型:C型)に分類した。さらにこの分類のどれにも当てはまらない子どもが存在することが後に指摘され(Main & Solomon, 1986)、これは無秩序・無方向型(D型)とされた。

Ainsworth (1978) は、これらのアタッチメントの個人差を生み出す主な要因は、養育者が子どもの欲求や感情にどの程度、的確に敏感に応答するのかという敏感性 (sensitivity) の差異であると、SSPでの養育者の子どもへの関わりの観察を通して主張したのである。

また、発達早期においてアタッチメントが安定型である子どもは、幼児期および児童期以降において認知、情動、対人関係などさまざまな領域で肯定的な発達を遂げるのに対して、不安定型や無秩序・無方向型の子どもは多くは社会心理的問題などを抱えながら成長するとされる (Weinfield, Sroufe, Egeland & Carlson, 2008)。

これまで述べたアタッチメント理論の中で、Bowlby (1969, 1973) や Ainsworth (1978)、及びそれ以降の研究者達が明らかにしてきた前提を以下のようにまとめることができる。

- ① 人間の乳児は危機的状況に置かれると、自分よりも能力があり頼りになる個体に近接を求めるアタッチメント行動を示す。また、アタッチメント対象の多くは養育者である。
- ② アタッチメントの質には、安定型、不安定型 (回避型と葛藤型)、無秩序型という個人差がある。乳児期においては、SSPによって示される子どものアタッチメント行動をもとに個人差を測定することができる。
- ③ 安定型のアタッチメントは、個人の健全な心理・認知発達や精神的健康と結びつく。
- ④ 安定型のアタッチメントの子どもの養育者は、子どもの欲求や感情に敏感に的確に応答するという敏感性 (sensitivity) が高い傾向にある。

これらの前提を児童期に当てはめた場合にどのように捉えることができるのかについて、児童期の発達のな特徴と重ねながら先行研究の概観を行うことで検討していく。

II. 児童期におけるアタッチメントとアタッチメント対象

児童期はそれまでの乳幼児期と比較すると、身体的にも心理的にも目覚ましい発達を遂げる。身体的には5歳代後半から7歳頃にかけて手足が伸びて細長な児童体型へと変化し、行動にも落ち着きが出てくる (杉山, 2005)。認知面では、Piagetの発達段階論では児童期前半は具体的操作期に相当し、後半は形式的操作期にさしかかる時期とされているように、言語による理解や他者への伝達を習熟させ、生活していく中で必要な事物についてある程度論理的に理解することが可能となっていく。Freudの精神分析学では、児童期は性的リビドーを抑圧させる「潜伏期」であり、Ericksonの心理社会的発達段階論では、この時期の発達課題が「勤勉性」とされることから、児童期は、人類が蓄積してきた文化である様々な知見を大人から、素直に、積極的に吸収する時期として位置づけられる。

このような身体的、心理的発達のため、児童期には危機的な状況においても乳幼児と比べれば、実際に養育者に接触するなどの物理的に近接を求める行動は減少する (Kerns, 2008)。

それに対して、困難な時に養育者を思い浮かべて安心感を得るという表層的な近接が重要となってくる。つまり子どもが、自身が困った時や心配な出来事に遭遇すれば、養育者は相談ののってくれたり助けてくれたりするであろうという、養育者の「利用可能性」(availability)についての主観的な感覚を持つことができることが、児童期における安定したアタッチメントと捉えることができる (Kerns, 2008)。

対人関係の面では児童期には、養育者以外の人々との関係に広がりを見せるようになる。特に友達との関係は、養育者からの自立を支えるものとして重要であり、その特徴も、児童期中期に多く見られる、同じ行動や遊びをすることでのつながりであるギャング・グループから、児童期後期以降には、同じ価値観や趣味などによるつながりである親友ともいえるチャムシップへと移行していく。前思春期には次第に養育者には秘密にし、友達だけに打ち明ける相談事が増えたり、養育者との外出を避けたりするように、養育者と距離を置こうとする姿も見せるようになる (青木, 2005)。

児童期におけるアタッチメント対象については、それまでの発達段階と同様に引き続き養育者であるとする考えと、養育者の役割は減り代わりに友人が重要な位置を占めるとする考えとがある。Kernsら (Kerns, Tomich & Kim, 2006) は、小学4年生と6年生を対象にし、「病気の時、怖い時、悲しい時」というアタッチメント場面と、「遊ぶ時、秘密のことを話す時」という仲間意識 (companionship) が発揮される場面とに分け、それぞれの場面で誰を求めるかということを探っている。その結果、小学6年生でもアタッチメント場面では、9割の子どもが養育者を選び、仲間意識が発揮される場面では9割の子どもが友人を選んでいることから、児童期の子どもが近接を求める対象は場面によって異なるが、アタッチメント対象は養育者であるとする前者の立場を取っている。Ainsworthら (1978) がアタッチメント対象の条件として挙げる、「子ども側が近接を求め、分離の際には苦痛を示し、再会では喜び、安全基地としている」ことや、「どのような時でも自分を助けてくれるという感覚を持つことができる」という観点からすると、友達や恋人が真のアタッチメント対象となり得るのは、青年期後期以降だとする指摘 (Allen, 2008) もある。

一方村上・櫻井 (2014) は、日本の小学4年生から6年生を対象に、大切な4人の人物を挙げその人物との関係を大切な順に記述させるという方法によって、児童期のアタッチメント・ネットワークを検討している。その結果、第一対象に友人を挙げる子どもが、小学4年生でも3割近く存在し、小学6年生では母親を挙げる子どもよりも高い割合で存在したこと、同時に多数の子どもが母親や父親を第3対象までに挙げていることから、児童期中・後期には養育者はアタッチメント対象であり続けるものの、その重要性の認知は徐々に低下し、仲間関係の重要性の認知が高まるとし、後者の立場を支持している。

児童期のアタッチメント対象についての前述した2つの立場を統合すれば、子どもが困難

な状況に置かれた際に最初に助けを求めようとするのは養育者であるものの、児童期中期から後期にかけては、その対象者は友人という家族以外の対象にまで広がっていくと考えられる。したがって、友人や恋人が真のアタッチメント対象となる青年期後期の前の、思春期から青年期前期を、養育者の重要性の比重が低下する「移行期」とするならば、児童期はアタッチメント対象を養育者以外に広げていくという意味で、その「準備期」ともいえるのではないだろうか。

Ⅲ. 児童期のアタッチメントの個人差と測定尺度

乳幼児期にはSSPという実験的観察法によって、母親との分離と再会場面における子どもの行動を捉えることでアタッチメントの個人差を分類することができる。しかし児童期では、前述したように危機的状況での養育者への物理的近接は減少するため、養育者の近接可能性について子どもがどのように捉えているのかという、子どもの表象からアタッチメントの個人差を把握する必要がある。そこから、児童期のアタッチメントの個人差を捉える尺度の種類としては、児童本人を対象とした質問紙法と面接法が主流となる。一方で親子の相互作用場面における子どもの行動から個人差を捉える観察法も一部の研究で実施されている。

質問紙法については、アタッチメントの安定性という次元を測定するカーズ・セキュリティ・スケール（以下KSS）が数多くの研究で使用されてきた（e.g., Kerns, Tomich, Aspelmeier & Contreras, 2000; Kim, Boldt & Kochanska, 2015）。これは8歳から12歳の子どもを対象に、「ある子どもたちは、お母さんを必要だと思うことがあまりありません。でも、他の子どもたちは多くのことでお母さんを必要だと思っています」などの表現を対にした15項目に対して、まず対になる文章のどちらの子どもに自分が似ているかを選び、さらに選んだ子どもの特徴がどの程度似ているかを4段階で選ぶように求められ、合計得点が高いほどアタッチメントの安定性は高いとされる。日本の小学4年生から6年生を対象にKSSを実施した研究（中尾・村上, 2016）では、尺度の次元性、および信頼性（内的整合性、再検査信頼性）と妥当性（収束的妥当性、弁別的妥当性、予測的妥当性）が確認されている。近年Kernsら（Kerns, Mathews, Koehn, Williams & Siener-Ciesla, 2015）は、この尺度の次元性を見直し、従来のKSSはアタッチメントのsafe haven（安全な避難所）を測定する質問項目がほとんどであったのを、secure base（探索を見守る安全基地）を測定する項目（例えば「子どもが親と話した後自信を持てるか」、「親は子どもの自由を尊重するか」など）を追加して計21項目とし、それぞれの機能を子どもがどのように捉えているかを把握可能なものに修正をしている。

もう一つ質問紙の中に、Hazan & Shaver (1987) の成人期のアタッチメント研究の流れからの成人愛着スタイル尺度（ECR）の児童版（児童版ECR-RS）がある。これは「見捨て

られ不安」と「親密性回避」という2次元から構成され、9項目という少ない質問項目から捉えることができるものである。中尾ら(中尾・村上・数井, 2019)は、児童版ECR-RSの日本語版が、「心の奥深いところにあることを、おうちの人に話すことは、気が進みません」などの6項目から構成される「回避」因子、「自分がおうちの人に本当に愛されているのか心配です」などの3項目から構成される「不安」因子という2因子構造であることを確認し、さらにこの尺度の信頼性と妥当性を示している。

次に面接法に関しては、代表的なものとして、AAIを参考に作成された、8歳から15歳の児童を対象としたChild Attachment Interview(以下CAI)が挙げられる。AAIが過去の養育者との関係についての語り方や内容をもとにアタッチメントの分類を行うのに対し、CAIは「今、ここ」での養育者とのやり取りに関する18の質問を行う(向井, 2018)。アタッチメント対象の表象について子どもが語る内容や非言語的な様子から、「とらわれた怒り」や「情緒表現の豊かさ」など8つの評価尺度をもとに、アタッチメントを「安定型」「軽視型」「とらわれ型」「無秩序・支配型」の4つに分類する(向井, 2018)。Borelliら(Borelli, Somers, West, Coffey, Reyes & Shmueli-Goetz, 2016)は、8歳から12歳の子どもを対象に、CAIで測定されたアタッチメントとKSSを含む複数の質問紙で測定したアタッチメントとの関連性、およびCAIと子どもの内在的問題や気質との関連性を分析することで、CAIの妥当性を示している。

CAIよりも対象年齢が4歳～9歳と下がるが、人形を使って子どもに話を作ってもらったAttachment Doll Play(以下ADP)も面接法の一つである。「ひざの怪我」「寝室のおばけ」「分離と再会」という3場面について、実験者が導入のストーリーを人形に演じさせた後、その話の続きを子どもに「自分人形」と「家族の人形」として選んだ人形を使って語ってもらう(山川, 2006)。語りの中で子どもが、「どのように表象や話を構成しているか」、「課題をどのようにまとめ、歪め、変えているか」などの側面に焦点を当てて、6コードとそれぞれの下位コードに基づいて、A, B, C, D型の4つのタイプに分類をする(山川, 2006)。George & Solomon(2016)は、ADPを使用して分類したアタッチメント安定型の子どもの母親は、子どもと共に経験した出来事を喜びを持って語り、子どもについての表象も、信頼感や協力という観点から語るなど最も統合されていること、親子相互作用においても調和的であることを明らかにすることで、尺度としての妥当性を示すと同時に、臨床場面における親子関係介入へのADPの応用可能性を示唆している。

観察法については、6歳児を対象に養育者との再会場面での子どもの反応を捉えるSSPと類似した手法を使った研究(Behrens, Hesse & Main, 2007)も一部にはあるものの、児童期では質問紙法や面接法に比べると採用している研究は限られる。その中でBoldtら(Boldt, Kochanska, Grekin & Brock, 2016)は、Iowa Attachment Behavioral Codingという手法で、パズ

ルを解いたり、困難なシナリオについての話し合いなど複数の設定場面における親子の相互作用の中での、子どもの会話のスタイルや感情の表出のあり方、養育者にどのように助けを求めるかなどに焦点を当て、12の評定コードをもとにA, B, C, D型の4つのタイプに分類をしている。

以上のように、児童期を対象としたアタッチメントの測定法には様々な種類が存在し、対象年齢も異なっており、乳児を対象としたSSPのような、ほとんどの研究で使用されるゴールドスタンダードな尺度は存在しない。Kerns (2008) によれば、研究で使用されている尺度の多くは、信頼性については確認されているものの、妥当性については複数の変数との関連の分析などによって、さらなる検証が必要である。Bosmans & Kerns (2015) は、ゴールドスタンダードな尺度は何かを議論するよりは、各尺度がアタッチメントのどの側面を測定しているのかを十分に考慮する必要があると指摘している。

IV. 児童期のアタッチメントと発達との関連

児童期のアタッチメントの安定性が、学校生活での適応や成績、あるいは情動的コンピテンスなど肯定的な発達状態と結びつくことが複数の研究の中で示されている。

学業コンピテンスとして扱われる従属変数も研究によって、IQ、教師評定の全般的な学業コンピテンスや学業成績など様々である。Granot & Mayseless (2001) は、小学4年生と5年生を対象にDoll Story Testによって分類されたアタッチメントが安定型の子どもは、回避型および無秩序型の子どもよりも学業成績が優れていることを示している。またKernsら (Kerns, Mathews, Koehn, Williams & Siener-Ciesla, 2015) は、修正版KSSとFriend and Family Interview (以下FFI) の2種類の方法によって、10歳から14歳の子どもの、父母それぞれへのアタッチメントをsafe havenとsecure base機能とに分けて測定し、それらと、教師が評定した学業に関わるコンピテンスとの関連を検討している。その結果、修正版KSSで測定した父親のsecure base以外の全てのアタッチメントと学業コンピテンスとに正の相関があることを明らかにした。

このようにアタッチメントの質が学業コンピテンスと関連するのはなぜだろうか。Westら (West, Mathews & Kerns, 2013) は両者を媒介する要因の説明として、van IJzendoornら (van IJzendoorn, Dijkstra & Bus, 1995) の挙げる以下4つの仮説を提示している。それは、アタッチメント—教示仮説 (安定したアタッチメントの子どもの養育者はよい教師であり、学校での成功を励ます)、社会的ネットワーク仮説 (安定したアタッチメントの子どもは、教師や仲間とよい関係を作る)、アタッチメント—協働仮説 (安定したアタッチメントの子どもは、学校での要請に対して協力的である)、アタッチメント—自己調整仮説 (安定したアタッチメントの子どもは、学校においてより動機づけられ、自己調整力が高い) である。

Westらは (West et al., 2013) は、大規模縦断調査の親子を対象に、24か月および36か月時のアタッチメントの安定性と、8歳から10歳時の学業成績およびIQの高さを媒介する要因として、子どもに高い質の教示をしたり学校での達成を励ますという母親の行動、仲間関係に関わるコンピテンス、学校における協同性、自己調整力の高さという子どもの特性を確認し、前述の4つの仮説全てを実証した。社会情動的側面に関わるアタッチメントと、認知的側面に関わる学業コンピテンスという、発達の異なる領域間の関連性を理解する上で、Westら (West et al., 2013) の研究結果は説得力を持つといえるであろう。

情動的コンピテンスとの関連については、複数の研究でアタッチメントの安定性と子どもの適応的な情動調整、および快情動の多さや不快情動の少なさとの関連性が示されている。例えば、Borelliら (Borelli, Crowley, David, Sbarra, Anderson & Mayes, 2010) は、8歳から12歳の子どもの対象にCAIによってアタッチメントを測定した後に、引き続き軽い恐怖を引き起こす実験に参加してもらい、ストレス状態を示すコルチゾール値の場面ごとの変化、および子ども自身に評定させた快・不快情動の感じやすさとアタッチメントの関連を検証した。その結果、アタッチメントが安定型の子どものコルチゾール値はCAI前では低く、恐怖実験の開始時には高いものの、最初の状態に戻るのは不安定型の子どもよりも速いこと、アタッチメントの安定性は日頃の快情動の多さと関連があることを示すことで、安定型の子どもの情動調整が不安定型の子どもよりも状況適応的であることを示唆している。また、9歳から11歳の子どもの対象としたKernsら (Kerns, Abraham, Schlegelmilch & Morgan, 2007) の研究では、アタッチメント安定型の子どものは、より多くの快情動を表出し、問題解決や援助を求めるなどの建設的なコーピングを行うこと、葛藤型および無秩序型の子どものは不快情動を多く抱くことが示されている。他にも、Colle & Giudice (2010) は7歳を対象に、人物の写真を見せ、その人物が行うであろう情動調整方略を答えさせることで、アタッチメントと情動調整との関連を検討している。その結果、認知的な問題解決方略については、安定型の子どものが最も多く回答し、無秩序型の子どものが最も少ない回答であることから、児童期初期の段階で安定型の子どものは、他のタイプの子どものよりも洗練された情動調整が可能であることを明らかにしている。これらの研究からは、児童期においてアタッチメントが安定している子どもは、情動調整や情動特性も適応的であり、反対にアタッチメントが不安定型であれば、情動調整の未熟さや不快情動の多さを抱える傾向にあるといえる。

このように、アタッチメントの不安定性から生じる情動的コンピテンスの低さは、児童期から青年期において、抑うつや不安障害などの内在的問題、及び攻撃性などの外在的問題と結びつきやすくなる。Brumariu & Kerns (2010) は、アタッチメントの不安定性から、子ども自身の、情動理解、情動モニタリング、情動表出や情動調整の困難さなどを媒介として、そこにさらに養育者側の過剰なコントロールや拒否という不適切な関わりや、子ども側の不

快情動の激しさなどの情動的気質が影響して、不安や抑うつという内在的問題が生じるモデルを示している。複数のメタ分析や縦断研究では、不安定型の中で回避型のアタッチメントを示す子どもが外在的問題および内在的問題を抱えるリスクが高いことを示すもの（Groh, Roisman, van IJzendoorn, Bakermans-Kranenburg & Fearon, 2012; Fearon, Bakermans-Kranenburg, van IJzendoorn, Lapsley & Roisman, 2010; Fearon & Belsky, 2011）がある一方で、葛藤型のアタッチメントを示す子どもがリスクが高いことを示す研究（Brumariu & Kerns, 2010）もあるというように、不安定型の下位分類については必ずしも関連性は一致しないが、無秩序型および不安定型の子どもは、安定型の子どもよりも何らかの情動的問題を抱える傾向が明らかにされている点では共通している。さらには、これらの問題が幼児期に明らかになることは少なく、児童期以降年齢を重ねるにつれ、情動調整方略や自己イメージがより固定化されるため、アタッチメントの不安定さと情動的問題の関連はより強くなっていくことが指摘されている（Brumariu & Kerns, 2010; Fearon et al, 2010; Fearon & Belsky, 2011）。

V. 児童期のアタッチメントの安定性につながる養育者の特性

乳児期のアタッチメントの個人差は、養育者の敏感性の差異によるとされ、乳児の信号を感知し、適切に解釈し、適切な行動を即時に返すという観点から評価される（Ainsworth et al, 1978）。近藤ら（近藤・井上・中野・草薙, 2006）は、母親の敏感性概念を検討し、乳児期のアタッチメントの安定性につながる敏感性は、子どもの信号を認知的に読み取る能力ではなく、子どもの視点に立ってその内面世界に思いをはせる能力と関連していると考察している。

一方、児童期には前述したように、乳幼児と比較した様々な側面での発達が見られることを考えれば、児童期における安定したアタッチメントにつながる養育者の関わりは、乳幼児に求められるものとは異なるはずである。

Bowlby（1969）は、アタッチメントの発達の最終段階として「3歳以降」としているが、実際にはそれ以降に年齢を経過していく中で、アタッチメントがどのように変化していくのかという点については具体的に述べてはいない。また、3歳以降に出現する「目標修正的な協調性の形成」についても、幼児期における他者の視点に立つことの未熟さゆえ、十分に発達し機能するのは「7歳の誕生日を迎えた後」と児童期以降であるとしている。親子の関係性も、乳児期のように養育者が子どもの欲求や感情を一方向的に満たすだけでなく、幼児期後半、特に児童期以降になると子どもの意図や感情あるいは自立心がより明確になり、心身もより発達するため、養育者と子どもとが共通の目標に向かってお互いに意見や感情を調整し合う（co-regulation）ことや、様々な意見や感情を出し合うというオープンコミュニケーションという双方向的な関係性が重要となる（Kerns, 2008）。

Kernsら (Kerns, Brumariu & Seibert, 2011) は、10歳から12歳の子どもの対象に、養育者の子どもに対する心理的なコントロールを、子どもによる評定と、親子相互作用場面の観察から捉え、アタッチメントとの関連を検討している。その結果、養育者の心理的コントロールの高さと子どものアタッチメントの安定性とに負の関連があることを示している。また、彼女たちとは文化圏の異なる中国の6歳から12歳の児童を対象とした研究 (Yan, Han, Tang & Zhang, 2017) においても、親子の相互作用の観察場面において、子どもの意見や問題解決を支持したり、子どもの主導性を許すなどの、子どもの自立を支える養育者の姿勢が、子どもの安定したアタッチメントと関連があること、その関連は子どもの年齢が高いほど強いことが示されている。

このように児童期においては子どもの行動範囲や交流対象の広がりを受けて、養育者が子どもの自立や自由を認める姿勢が重要ではあるものの、まだこの時期の子どもの認知力や判断力、行動力には完全に自立する上で限界があるため、養育者が子どもの活動を知り、見守るという「監督 (supervision)」も重要となる (Kerns et al, 2011)。したがって、児童期の養育者には、子どもの行動の監督と、自由を保障することのバランス (Kerns et al., 2011) という難しい対応が求められるといえよう。

本来、アタッチメントは危機的な状況において生じた恐れや不安という不快情動を子どもが表出し、養育者が子どものこうした情動を低減することである点を考慮すれば、子どもの情動を養育者がどのように捉えるのかという、養育者の meta-emotion (Gottman, Katz & Hooven, 1996) も子どものアタッチメントに影響を及ぼすことが想定される。この観点から小学5年生と6年生を対象とした研究 (Chen, Lin & Li, 2012) では、子どものアタッチメントの安定性と、子どもの情動をコーチングする養育者の姿勢とに正の関連が、子どもの情動を軽視する傾向と負の関連があり、一方で子どもの気質という情動特性とアタッチメントとは関連が見られないことが明らかにされている。

VI. 児童期のアタッチメント研究における今後の課題

以上、アタッチメント理論の4つの前提をもとに児童期のアタッチメント研究を概観した。長い間、児童期のアタッチメントについては個人差を測定するゴールドスタンダードな尺度がなかったこともあり、研究の空白期ともされたが、本稿で概観したように近年では様々な方法が開発され、これらを使用した児童期のアタッチメントと発達や心理的健康との関連についての知見も提示されている。とはいえ、まだ児童期のアタッチメント研究に関して十分とはいえない領域も複数あると考えられる。本稿では以下の3点を指摘したい。

一点目は、児童期のアタッチメントの安定性に関連する養育者の子どもへの関わりや親子関係についてのさらなる検討の必要性である。前述したように、児童期は子ども側の自立心

の高まりや交流範囲の広がりによって、親子関係も乳幼児期とは異なった様相となる。先行研究では児童期のアタッチメントには、養育者と子どもとの相互交渉や調整、あるいはオープンコミュニケーションが重要とする指摘がされてきた。しかし同時に、児童期については、どのような養育者の関わりや態度、親子関係が安定したアタッチメントにつながるのかについてはまだ不明なことも多いともされる (Kerns et al, 2011)。また、欧米の先行研究で指摘された親子関係のあり方が、実際に日本の親子間にも当てはまるのかという点については、さらなる検証が必要と考えられる。例えば、自身の意見や感情を言葉で表現し相手に伝え、意見を調整することが教育でも家庭でも重要視される欧米とは異なり、「全てを言わなくてもお互いに分かり合える」ことが親密な関係だとされる傾向のある日本において、親子間での相互交渉や調整とは、どのような性質を持っているのであろうか。欧米の先行研究の中でも、親子の相互作用場面の観察という手法を使うことで、児童期のアタッチメントと親子関係の質や養育者の関わり方との関連を検討したものは比較的少なく、信頼性や妥当性の検討も十分とはいえない。子どもから捉えた養育者の関わり方という子どもの表象からだけでなく、実際に親子の相互作用場面での観察を通して、安定的なアタッチメントにつながる親子関係の特性や、養育者の関わり方や態度を検証することがさらに必要であろう。

二点目は、アタッチメント研究において養育者として父親が対象となる研究の少なさである。BowlbyやAinsworthらの当初の主な研究関心が、子どもと母親との関係であったことから、現在も圧倒的に母親を対象とした研究が多く、父親を対象とした研究は限られている。アタッチメントをsafe haven機能（安全な避難所）とsecure base機能（探索を見守る安全基地）とに分けた場合、児童期の子どもは母親には前者を、父親に対しては後者を求めることが示されている (Kerns et al., 2015) ように、アタッチメントの形成において、父親は母親とは異なる影響を与えているはずである (Bretherton, 2010)。幼児期の父親の関わり方とアタッチメントの関連性については、Grossmannら (Grossmann, Grossmann, Fremmer-Bombik, Kindler, Scheuerer-Englisch, & Zimmermann, 2002) が、2歳時に父子での遊び場面において、子どもの視点に立った説明や、子どもに受け入れられる提案をするなど父親に十分な配慮があることが、6歳時および10歳時の子どものアタッチメントの安定性を予測するのに対して、母親についてはそのような関連性は見られなかったことを示している。認知発達が進み関心領域が広がる児童期において、母親とは異なる父親独自のどのような関わりが子どもの安定したアタッチメントにつながるのかという点の解明が求められる。

最後に、アタッチメントの中でsecure base機能についての実証的な検証への期待を挙げる。従来、アタッチメント研究では、子どもが危機的な状況に置かれた際の避難場所というsafe haven機能が重視され、探索の安全基地としてのsecure base機能について焦点化された研究は限定されてきた (Kerns et al., 2015)。アタッチメントの個人差を測定する尺度について

も、SSPをはじめ多くは主に safe haven 機能を測定するものとして開発されている。しかし、実際のところ私たちヒトにとって、日常生活において重大な危機的な状況というのは、それ以外の状況に比べれば少ないはずである。また、私たちが知識を吸収し学ぼうとする姿勢は、secure baseの対象を物理的にも表象的にも身近に感じ、利用可能であることを感じることで生まれる。Waters & Cummings (2000)は、secure baseを中心にアタッチメント理論を構築し直すことの必要性を指摘する中で、個人が環境と相互作用しながら、どのようにsecure baseを利用し周囲を探索し学ぶのかについて、日常に近い状況での観察から、様々な年齢や特性、文化の人たちを対象に研究をすることを提案している。

safe haven機能が不安や恐れなどの不快情動に関連するのに対し、secure base機能は、安心感、興味あるいは喜びなどを抱きながら、周囲の世界を探索することを支えるという意味で、快情動に関連しているといえる。したがって今後のアタッチメント研究においては、児童期だけではなく乳幼児期や青年期以降の成人期を対象に、不快情動からの回復や快情動の多寡など、secure base機能と情動調整や快情動との関連についての研究も重要となるのではないだろうか。

FreudやBowlbyが発達早期の親子関係を重要視した経緯もあり、現在もアタッチメント研究や臨床では乳幼児期に焦点が当たることが多い。しかし児童期には、乳幼児期の過不足を補い、課題のやり残しを取り戻すという意義がある(青木, 2005)とすれば、様々な精神疾患や心理的脆弱性が顕著になる思春期・青年期の前に、親子関係や発達上の問題を見直すためにも、アタッチメント理論をもとに発展させた、児童期に焦点を当てた研究が今後一層求められるといえるであろう。

付 記

本稿の作成にあたっては、日本発達心理学会主催の2018年度国際ワークショップ「児童期の親子間のアタッチメント」に参加時の、Kathryn A. Kerns先生の講義、他の先生方の発表および参加者とのディスカッションから多くの示唆を得た。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Belhar, M. C., Waters, E. & Walls, S. (1978). *Patterns of Attachment: A psychological study of the strange situation*. Erlbaum.
- Allen, J. P. (2008). The attachment system in adolescence. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment* (2nd ed.), pp. 419-435. Guilford.
- 青木省三 (2005). 人生における小学校時代. *そだちの科学*, 4, 2-5.
- Behrens, K. Y., Hesse, E. & Main, M. (2007). Mothers' attachment status as determined by the Adult Attachment Interview predicts their 6-year-olds' reunion responses: A study conducted in Japan. *Developmental Psychology*, 43, 1553-1567.
- Boldt, L. J., Kochanska, G. Grekin, R. & Brock, R. L. (2016). Attachment in middle childhood: Predictors,

- correlates, and implications for adaptation. *Attachment & Human Development*, 18, 115-140.
- Borelli, J. L., Crowley, M. J., David, D. H., Sbarra, D. A., Anderson, G. M. & Mayes, L. C. (2010). Attachment and emotion in school-aged children. *Emotion*, 10, 475-485.
- Borelli, J., L., Somers, J., West, J. L., Coffey, J. K., Reyes, A. D. L. & Shmueli-Goetz, Y. (2016). Associations between attachment narrative and self-report measures of attachment in middle childhood: Extending evidence for the validity of the Child Attachment Interview. *Journal of Child & Family Studies*, 25, 1235-1246.
- Bosmans, G. & Kerns, K. A. (2015). Attachment in middle childhood: Progress and prospects. In G. Bosmans & K. A. Kerns (Eds), *Attachment in middle childhood: Theoretical advances and new directions in an emerging field.*, pp. 1-14. Wiley.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1, Attachment.* (ポウルビー, J/黒田実郎他訳 (1976)「母子関係の理論Ⅰ 愛着行動」岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol.2, Separation.* (ポウルビー, J/黒田実郎他訳 (1977)「母子関係の理論Ⅱ 分離不安」岩崎学術出版社)
- Bretherton, I. (2010). Fathers in attachment theory and research: A review. *Early Child Development and Care*, 180, 9-23.
- Brumariu, L. E. & Kerns, K. A. (2010). Parent-child attachment and internalizing symptoms in childhood and adolescence: A review of empirical findings and future directions. *Development and Psychopathology*, 22, 177-203.
- Chen, F. M. Lin, H. S. & Li, C. H. (2012). The role of emotion in parent-child relationships: Children's emotionality, maternal meta-emotion, and children's attachment security. *Journal of Child & Family Studies*, 21, 403-410.
- Colle, L. & Giudice, M. D. (2010). Patterns of attachment and emotional competence in middle childhood. *Social Development*, 20, 51-72.
- Fearon, R. P., Bakermans-Kranenburg, M., van IJzendoorn, M. H., Lapsley, A. M. & Roisman, G. I. (2010). The significance of insecure attachment and disorganization in the development of children's externalizing behavior: A meta-analytic study. *Child Development*, 81, 435-456.
- Fearon, R. P. & Belsky, J. (2011). Infant-mother attachment and the growth of externalizing problems across the primary-school years. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 52, 782-791.
- Fraley, R. C. (2002). Attachment stability from infancy to adulthood: Meta-analysis and dynamic modeling of developmental mechanisms. *Personality and Social Psychology Review*, 6, 123-151.
- George, C. & Solomon, J. (2016). The Attachment Doll Play assessment: Predictive validity with concurrent mother-child interaction and maternal caregiving representations. *Frontiers in Psychology*, 7, 1-12.
- Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C. (1996). Parental meta-emotion philosophy and the emotional life of families: Theoretical models and preliminary data. *Journal of Family Psychology*, 10, 243-268.
- Granot, D. & Maysel, O. (2001). Attachment security and adjustment to school in middle childhood. *International Journal of Behavioral Development*, 25, 530-541.
- Groh, A. M., Roisman, G. I., van IJzendoorn, M. H., Bakermans-Kranenburg, M. J. IJzendoorn, M. H., Bakermans-Kranenburg, M. J. & Fearon, R. P. (2012). The significance of insecure and disorganized attachment for children's internalizing symptoms: A meta-analytic study. *Child Development*, 83, 591-610.
- Grossmann, K., Grossmann, K. E., Fremmer-Bombik, E., Kindler, H., Scheuerer-Engelisch, H., & Zimmermann, P. (2002). The uniqueness of the child-father attachment relationship: Fathers' sensitive and challenging play as pivotal variable in a 16-year longitudinal study. *Social Development*, 11, 307-331.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Kerns, K. A., Tomich, P. L., Aspelmeier, J. E. & Contreras, J. M. (2000). Attachment-based assessments of parent-child relationships in middle childhood. *Developmental Psychology*, 36, 614-626.
- Kerns, K. A., Tomich, P. L. & Kim, P. (2006). Normative trends in children's perceptions of availability and utilization of attachment figures in middle childhood. *Social Development*, 15, 1-22.
- Kerns, K. A., Abraham, M. M., Schlegelmilch, A. & Morgan, T. A. (2007). Mother-child attachment in later

- middle childhood: Assessment approaches and associations with mood and emotion regulation. *Attachment & Human Development*, 9, 33-53.
- Kerns, K. A. (2008). Attachment in middle childhood. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment* (2nd ed.). pp. 366-382. Guilford.
- Kerns, K. A., Brumariu, L. E. & Seibert, A. (2011). Multi-method assessment of mother-child attachment: Links to parenting and child depressive symptoms in middle childhood. *Attachment & Human Development*, 13, 315-333.
- Kerns, K. A., Mathews, B. L., Koehn, A. J., Williams, C. T. & Siener-Ciesla, S. (2015). Assessing both safe haven and secure base support in parent-child relationships. *Attachment & Human Development*, 17, 337-353.
- Kim, S., Boldt, L. & Kochanska, G. (2015). From parent-child mutuality to security to socialization outcomes: Developmental cascade toward positive adaptation in preadolescence. *Attachment & Human Development*, 17, 472-491.
- 北川恵・工藤晋平(2017). アタッチメントに基づく評価と支援. 誠信書房.
- 近藤清美・井上望・中野茂・草薙恵美子(2006). アタッチメントに関わる母親の感性概念の検討. *心理科学部研究紀要*, 2, 13-24.
- Main, M., & Solomon, J. (1986). Discovery of an insecure-disorganized/disoriented attachment pattern. In T. B. Brazelton & M. W. Yogman (Eds.) *Affective Development in Infancy*. pp. 95-124.
- 向井隆代(2018). 児童期から青年期前期の愛着測定—児童愛着面接 (CAI: Child Attachment Interview)の可能性—. *聖心女子大学論叢*, 132, 155-188.
- 村上達也・櫻井茂男(2014). 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討—児童用アタッチメント機能尺度を作成して—. *教育心理学研究*, 62, 24-37.
- 中尾達馬・村上達也(2016). 児童期中期におけるアタッチメントの安定性を測定する試み: カーンス・セキュリティ・スケール(KSS)の日本語版作成. *発達心理学研究*, 27, 72-82.
- 中尾達馬・村上達也・数井みゆき(2019). 児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み—児童版ECR—RSの日本語版作成. *パーソナリティ研究*, 27, 179-189.
- 杉山登志郎(2005). 学童期における心と脳の発達. *そだちの科学*, 4, 6-13.
- van IJzendoorn, M. H., Dijkstra, J. & Bus, A. G. (1995). Attachment, intelligence, and language: A meta-analysis. *Social Development*, 4, 115-128.
- Waters, E. & Cummings, E. M. (2000). A secure base from which to explore close relationships. *Child Development*, 71, 164-172.
- Weinfield, N. S., Sroufe, L. A., Egeland, B., & Carlson, E. (2008). Individual differences in infant-caregiver attachment. In J. Cassidy & P. Shaver (Eds.). *Handbook of Attachment* (2nd ed.). pp. 78-101. Guilford.
- West, K. K., Mathews, B. L., & Kerns, K. A. (2013). Mother-child attachment and cognitive performance in middle childhood: An examination of mediating mechanisms. *Early Childhood Research Quarterly*, 28, 259-270.
- 山川賀世子(2006). 幼児の愛着の測定—Attachment Doll Playの妥当性の検討—. *教育心理学研究*, 54, 476-486.
- Yan, J., Han, Z. R., Tang Y., & Zhang, X. (2017). Parental support for autonomy and child depressive symptoms in middle childhood: The mediating role of parent-child attachment. *Journal of Child & Family Studies*, 26, 1970-1978.

A Review of Attachment in Middle Childhood

KANAMARU, Tomomi

The goal of this article is to review the recent empirical studies about attachment in middle childhood, focusing on four points, (1) the nature of attachment in middle childhood, and attachment figures for middle-aged children, (2) measuring methods of attachment in middle childhood, (3) associations between secure attachment and school adaptation, emotional competence and behavior problems, (4) associations between secure attachment and the quality of parenting. Finally some needs of further study in this area, and the significance of middle childhood in the life-span development are discussed.